Ōno Hedō, "Sanpaikyō no kenkyū", Shūkyō kenkyū 宗教研究, 4, 5 (1922), pp. 796–804

三階教の研究

大野法道

とりわけ應變自在の變通性を多分に持つてゐると言はるゝ佛教の歴史は、時代と社會と風習とから押しよせる刺戟に逗合して頗る多樣なる發達を示し、時には異樣なるものさへも現出した。が其間又傳統を去て佛陀精神の直接把握を叫び、滔々として流れゆく一般の方向から分離し清新の氣分を漂はしたものも少くない。自家の信條を以て佛陀精神の直接把握なるを自任し舊來の傳統に懐らずして與つたものが各宗であるが、それは必ずしも從前の方向から分離したものばかりではなく、寧ろ前世紀から流れ來れる方向に僅かばかりの改造を加へて成れるものが意外に多い。

た佛教の一派であるが、變通性から見れば實に異樣なものであると同時に、憚りなく獨自の境地を振り翳し、傳統を破つて六朝已來の傾向から分離した革新運動の典型である。從て支那佛教一般の流れに浮ぶ各宗とは根底に於てソリの合はぬ所があるばかりでなく、三階教徒は自ら持すること極めて峻嚴であつて妥協性を缺いた爲に、内外兩方面から敵視され、異端視され、危險視されて貶毀棄捨せらるゝ運命に陷つた。かくして三階教は常に非難攻撃の的となつて、教籍は傳播を妨遏せられ、唯僅かに斷片的に各宗の書に引載さるゝのみであつたから、思想體系は明らかでなく、實行の方面迄に[illegible]

特別の注意を惹かるゝことなく、永らく「解けぬ謎」として捨て置かれた觀があつた。

かゝる積年の闇黑を破つて三階敎に關し周到なる研究を遂げ、その思想體系歷史及び實行方法を明らかにしたものが最近岩波書店から發行された矢吹慶輝博士の「三階敎の研究」である。此書は四六倍版千二百余頁の大册であるが第一部を敎史と敎籍史に分ち、中に一、敎祖信行傳 二、三階敎三百年史 三、歷代三階敎籍錄 四、三階敎籍の性質 五、現存三階敎籍斷片を說き、第二部を敎義及び實修とし一、三階敎の下に名義宗趣、末法觀、正像末、時代觀、約時約人の三階を述べ、二、敎判の下に前代の敎判、三階と對根起行法、光宅寺法雲四乘敎との對比、華嚴宗の批評、一乘と普法を述べ、三、普別二法と對根起行の下に此敎の佛敎觀（二十四段佛法）佛陀觀（普眞普生佛）法と僧、度斷修求、機根論を述べ、四、生盲佛法と普行の下に生盲佛法、普敬認惡、普行、七階禮懺、此敎の淨土思想を述べ、五、三階敎と末法佛敎の下に此敎と群疑論、念佛鏡と十疑論、淨土敎との同異、念佛三昧寶王論との關係付融通念佛宗、日蓮宗との關係を述べ、六、無盡藏法と地藏敎の下に所依經典、無盡藏法と五義相對十一段義、地藏敎との關係を述べてある。第三部附篇には三階敎年譜、本敎關係の僞經諸斷片研究、及び則天武后朝の秘史を載せ、更に別篇に敎籍の現存するもの——燉煌出土本と本邦所傳の三階佛法四卷の校訂とを收錄してある。

信行は天台と同時の人であり、地論宗の慧遠、攝論宗の眞諦より稍後輩で、三論宗の吉藏、華嚴宗の杜順、淨土敎の道綽より少しく先驅に當るから、支那佛敎の精華といはるゝ隋唐の各宗成立期の眞正中に生れた。そして隋開皇年間に三階敎を唱へ出したのであるが、其開敎の態度主眼はそれらの諸宗とは大に異るものであつた。「與先舊德解行弗同。不令聲聞兼菩薩行。捨二百五十戒居大僧下在沙彌上。門徒悉行方等

結淨頭陀乞食、一日止一飡、在道路行、無問男女、率皆禮拜、欲似法華常不輕行」と費長房が歴代三寶記に傳へた一節によつて彼の風格の特徴が知らるゝ。六朝已來支那佛教の流れは東晉道生の涅槃經豫言の逸話に導かれて先づ涅槃經尊重の涅槃宗が顯はれ、次で地論攝論など一經又は一論を尊崇し、其思想の優越と共に教化力の切實を自任して以て得たりとするものであつた。佛教界はかゝる潮流に乘じてそれ〳〵花を咲かせ、或は將に咲かせんとしつゝある時、それと全く行き方を異にした信行は客觀的に經文の意義を探る前に先づ獨り超然として世相の動きと其中にうごめく自分を見詰めた。彼が三十五歳の時の北周の廢佛毀道と沙門道士二百餘萬の還俗强制、卅九歳の時に出遇つた齊國の佛寺破壞と僧尼三百餘萬の歸俗は、正しく見せつけられた法滅の相として大なる衝動を彼に與へた。獨り爲政者ばかりでは無い。洛陽の僧正、宋の沙門都、魏の僧統、魏の大僧正、宋の尼僧正など僧官を設けて教家を取締つた事實は、そこに背德無慚の續發したことを否み得ない。具戒上臘の大比丘僧も其素行に於て取締を受けねばならぬ僧伽の姿と、得意げに采配を振る僧官の所作とは、清操の權化ともいふべき彼の怒感をいよ〳〵增上した。加之、敬虔なる彼は陸續として眼前に提示さるゝ佛陀の末法に對する豫言を記した經典――大薩遮尼乾子經の末法爲政者の非法、佛藏經の末法道俗の墮落、大賊、怨家、外道、惡魔などと呼ばるゝ非行、その他最妙勝定經、像法決疑經等に說かれた末法の世相を見ては、何事よりも先づ末法の實感におのゝかざるを得なかつた。

かやうに經說に適中する恐ろしき末法の世に驚いた彼は、從來の流れの上に浮び出た又は出るべき佛教は、到底時人を救ひ得ぬものとして末法相應の法を求めたのであつた。その傾向からして遂に彼は時と人と處とから僞妄と[illegible]に分け、時には[illegible]、人には一乘[illegible]、且上

利根、持戒又は破戒正見衆生)三乘の機(一般利根、破戒又は破戒正見衆生)世間の機(鈍根、破戒邪見衆生)。處には一乘を說く淨土、三乘を說く穢土、末法佛敎を說くべき穢土と區別し、現時の佛敎はすべて第三階佛法でなければならぬとの信仰を確立したのである。日本鎌倉時代に成立した淨土宗・眞宗・日蓮宗は、一齊に末法佛敎の自覺を立脚地とするが、支那ではそれより遙か前の時代に夙に其先蹤があつたのである。斯く信行は現人の病を見てそれに相應する藥を見出したので、常に「藥病相當」又は「對根起行」を主唱する。隋唐已後支那日本の佛敎で時機相應、機敎相應の聲が喧いが、それの痛烈なるものは三階敎が始めて叫んだのである。鎌倉時代に成立した淨土宗、眞宗、日蓮宗は一齊に末法佛敎の自覺を立脚地とするが、支那ではそれより遙か前の時代に既に其先蹤があつたのである。信行の謂はゆる第三階の佛法とは如何なるものであつたか。彼はそれを普法と呼び、又根本

[1]特別の注意を惹かるゝことなく、永らく「解けぬ謎」として捨て置かれた觀があつた。

想を述べ、五、三階敎と末法佛敎の下に此敎と群疑論、念佛鏡と十疑論、淨土敎との司異、念佛法、觀佛法など稱した。第三階の時代にあつては人は破戒邪見で一方に偏執するから、決して特殊の一經に依る別法を與ふべきでなく、諸經に通亙する如來藏・佛性の說に依りて、各人に強い自覺を催發すべき普法を以てすべきものとして普した。かゝる普法が眞正のものであるとして眞普正の語を用ひてゐる。斯くて三階敎は一經尊重の別法を排拒するのであるが、實はかの法華に依る天台宗が、實相に基いて圓融無碍・十界互具を說て萬人の成佛を敎へ、華嚴に依る華嚴宗が法界に立て無盡緣起・相卽相入を說じて衆生の肯定を示すに比し、精粗の別はありとするも結果に於て頗る類似する所があるのは奇と言はねばならぬ。

普法を佛陀論に應用したのが、衆生のすべて佛を見る普佛の說である。第三階の人は偏邪憍慢惡衆生であるけれども、內具の佛性からすれば如來藏佛であり又佛性佛である。彼等は時期至れば成佛するところの當來佛であり、今に

於て佛たるべきを想定し得る佛想佛であるとした。かくして一切衆生は極端に肯定せられ、一として佛たらざるなきに至り、更に進んで佛教巳外の神までも普佛の中に取り入れて邪魔佛と名けて汎神思想を構成したのである。之はかの天台が六即の説を立て、たとへ佛教の何たるやを知らず、毫も信心起行の第一歩を履み出さぬ者でも、實相の理は具へてゐると見て理即佛と名けたことを連想せしめる。又密教があらゆる現實相を曼荼羅界會の莊嚴と見て、大日如來の眷屬とすることも思ひ出さるゝ。更に日本天台の本覺思想に於て「妙覺一轉して理即に極まる」と言ひ、それを純化獨立した日蓮宗に於て、衆生を無作三身の佛と見るもの等に比較すれば、そこに始覺・本覺の區別があり、因(衆生)から果(佛)へと果から因へとの考へ方の違ひはあつても、佛教の理想を直ちに一切衆生の現實の上に説くものとしては共通點を見出すに難くは無い。

普法普佛から導かるゝ實行が普行である。普行には普敬と認惡とがある。人にして普佛たらざるものは一もないのであるから、人は互に他を敬禮することが普敬である。信行を始として教徒は法華常不經菩薩の範によつて道路に人々を禮拜して歩いたといふ。普敬の行を徹底せしめ、おのづから各自の修養に資するものが認惡である。「自ら惡に徹することに依て他の善に徹することを得。若し自他共に善を見れば自ら惡を見ること徹せず。又自他共に惡を見れば他の善を敬ふこと徹せず」と説いて、他には善を任めて普敬し、自らは惡を認めて一切惡の斷盡につとめ、忍苦頭陀など無盡の善根を植えることを教へた。普法普佛の樣な汎神論の信仰は由來現實の充足に溺れて、度斷修求の精進行を等閑にする邪道に陷り易いのであるが、三階教が其信仰に立つ實修として他を敬ひ自らを責むることを教へたのは、人に不斷の精進道を歩ましむる佛教の本義に稱ふものである。

三所教の歴史は不幸としては[illegible]

[illegible]特別の注意を惹かるゝことなく、永らく「解けぬ謎」として捨て置かれた觀があつた。

想を述べ、五、三階教と末法佛教の下に此教と群疑論、念佛說と十疑論、[illegible]

利根、持戒又は破戒正見衆生)三乘の機(一般利　佛法、[illegible]

つた。がそれでも可なりの傳播を爲し、約四百年の命を持つたのである。信行の門下に本濟、僧邕、慧如、慧了あり。信徒に信行の講說を筆錄した裴玄證、隋の大興(長安)の都市計畫を司つた高熲があり。本濟門下に道訓、道樹、善知が傳へられ。唐代に入つて孝慈、神防、信義、薩瑀、(太宗の臣)僧海、越王貞、(太宗の子)王居士、道安、尙直、梁師亮、法藏(淨域寺)、滿大師、諗法師などあり、婦人では太宗の朝に安西都護となつた裴行儉の妻庫狄氏、裴公の妻賀蘭氏などを金石文並に本教關係の斷片などから拾集することが出來るのである。併し此教は斷えず世間からも各教からも嫌はれた。其開教は開皇の始めであるが、信行歿して間もなき文帝の開皇二十年に、教籍の流行を勅禁した、後武周朝に二度、玄宗朝に二度、武宗朝に一度の法難を蒙つた。但し武宗會昌の破佛は一般佛教の破壞であるから、三階教のみの受難は前後五回である。又本教の教籍を佛書の列に加へずして之を僞經目錄に編入したのが大周刊定衆經目錄である。次で開元錄には之を僞妄亂眞錄に納めたばかりでなく、「信行の所撰、經文を引くと雖皆偏見に黨し、妄りに穿鑿を生じ、既に聖旨に乖反し復た眞宗を冒す」と言ひ、「天授の邪三寶に似てゐる」とまで貶毀してゐる。又淨土教の懷感は群疑論に於て最も辛辣に此教を攻擊し、「諸學流に勸む。聖旨を審諦して自ら誤りまた餘人を誤り、諸大乘微妙の經典をして世に絕行せしむるを得ることなかれ、將に毒藥たらんとす。これ地獄の因なり。正法眼を滅す。何ぞそれ顚倒傷むべきの甚しきものや」と言つてゐる。念佛銳にも亦强く非難の跡を見る。蓋し三階教と淨土教とは末法佛教、罪惡の自覺、時機相應等の共通點があるのみでなく、自分等の信ずる佛教の外は末法に無用として捨てる同一の立場から、一は特別の佛に歸依するは謗佛の重罪になるとして、普法の教義に基く普佛を信じ、普佛でなくば末法の人は救はれぬとしたに反し、一は彌

陀一佛のみに依憑するから、兩者の間には根本に於て避けがたき齟齬衝突の因緣が結ばれてゐた故に淨土敎が盛になるにつれて三階敎を邪魔物として排斥する意識が强くなつた。かゝる內外の攻擊は更に敎祖敎徒の死後の厄難を見たといふ說を生むことゝなつた。神都（則天后の時長安の別稱）福先寺の僧某が、信行は死後に大蛇となり敎徒は其口に吸はれてゐるのを見たといふが如き、其他多くの三階敎徒の受苦が傳へられてゐる。（唐懷仁の釋門自鏡錄）斯樣に敎界の風潮は本敎徒の恐るべき罪報を揭げて、自他共に此敎に接觸することを警誡したものであつた。

日本では其敎徒は勿論、充分に三階敎を知悉した者も無いのであるが、それにも係はらず邪宗の典型として非難攻擊の的とする形だけが盛に流行したのは奇なる事である。新たに開かれたる淨土宗に對し、興福寺からの攻擊のための案狀の一節（萬善を妨ぐる先）に、諸善を捨てゝ念佛いみじく取もに邪法邪師であつて、五逆よりも深重なるものであり、三階敎に類するものだと言つてゐる。又日蓮の撰時鈔には「善導法然等が千中無一の惡義は三階禪師の說に同じ」と言ひ、其他淨土宗の圓宣の挫偈打磨編には、眞宗を非難して「敎行信證は頗る三階集錄に類似してゐる、これ偈解者流の風格なり」と言ふ如き、眞宗の了詳が「日蓮の法は三階敎に似たり」と言ひ、「淨土敎も偏執する時には三階敎と同じきものとなる」と言ふ如き、此等はすべて各自の宗義に立ちて他宗を非難するに當り、誤れるもの、邪僻なるものゝ典型として、常に三階敎を取り用ひてゐるのである。古來嘗て此敎を理解しやうと企てた者すらなくして、（材料の缺乏にも依るが）支那の傳統により頭から邪宗として受取られた此敎が、如上の意味で斯くも廣く一種の傳播をしてゐるのは全く奇妙な因緣と言はねばならぬ。

年(五四〇)から趙宋太宗大平興國三年(九七八)までの三階教並に其關係の史實を列ね。示所犯者瑜伽法鏡經に就ては、六朝時代製作の僞經たる像法決疑經に首尾の附加を爲して、此經を僞造した顚末を述べ、然もそれは三階教徒で唐容宗の宮廷に入り込んでゐた師利に依て爲されたもので、正議太夫や昭文館學士等と共謀した史實と、三階教の主張に權威を與ふべく造られたるを論じ、大雲經と武周革命は、燉煌出土武后登極讖疏を始とし、則天武后の革命に潛む謂はゆる邪三寶——武后は彌勒下生の佛、武后受命の讖を記せる僞經大雲經は法賣僧懷義は僧であること、大雲經流布のため各洲に大雲經寺を建てた事など、武周佛教の秘史を明らかにして、支那佛教史の一部を照破した。

別篇に收錄する三階教籍は、寔に珍貴なる資料である。之を內外各地に蒐集した著者の苦心は尋常一樣ではなかつた。著者は大正五年六月英國に在りて、第三回西域學術探險を終つて倫敦に歸つたスタイン博士の蒐集品中、七千餘點の古寫本を調査して未傳佛籍數百點を得、其中八葉の三階教籍斷片の發見を始とし、越えて大正十一年十一月再び渡歐の途に上り、更に新たなる發見を得、巴里國民圖書館のペリオ蒐集品中よりも數點を加ふることゝなり、遂に現今世界的に索め得る限りの十九種資料が收錄さるゝことゝなつたのである。燉煌出土の信行遺文(スタイン本)は特に稀覯の殘卷であり、燉煌本三階佛法卷二(スタイン本)卷三(ペリオ本)は本邦所傳と內容一致せざる異本、四卷三階の註釋たる三階法密記(ペリオ本)對根起行法(スタイン本)無盡藏法略說(同)無盡藏法釋(同)七階佛名(同)信行口集眞如實觀起序第一、普法四佛、如來身藏論(同)人集錄部目一卷(ペリオ本)龍錄內無名經論律(同)示所犯者瑜伽法鏡經(スタイン本)は、此中の一部に相當する斷片略本を除いては、全然學界未知の資料である。本邦所傳の三階佛法四卷は互に出沒ある法隆寺本、興聖寺本、聖語

寫本、及び群疑論所引を對校し、且つ句讀反點を附してある。

博士が三階教研究に着手されてから本書の出版までには、實に十年を經過してゐる。初稿は大正十一年に成つたのであるが、翌十二年著者は第二次の渡歐の旅程を終へて瀬戸内海航行中の九月一日大震災に遇ひて其正副二本を烏有に歸し、爾來忍び難き辛苦を經て第二稿を見るに至つたのが大正十三年十一月であつた。それより更に修文添削の功を積みて本書を成すに至つたのである。更に一言附加すべきものがある。それは著者累年の專意精進を援けつゝ、夥しき資料草稿の堆積を衞りて、只管功成るの日を待たれし夫人が、本書脫稿の翌日溘焉として逝去せられた涙ぐましき事實の伴つた事である。斯くして本書は著者博士に取りて實に思ひ出ふかき紀念となつたのである。